

Scott と Shakespeare

山 川 鴻 三

1

Sir Walter Scott はスコットランドとイングランドの国境地方でそのあたりの物語や民謡を聞いて育ち、中世風のロマンチックな騎士の物語に興味をもつようになった。若いころ彼に一番大きな影響を与えたのは Percy の *Reliques of Ancient English Poetry* であったが、英文学では Spenser の *The Fairie Queene* とともに Shakespeare であった。おそらく彼の数ある小説のなかでもっとも Shakespeare 的であるのは、ともに女主人公の悲劇的な死を描いたドラマチックな (Shakespeare にくらべるとよりメロドラマチックであるかもしれないが) 二篇の小説 *The Bride of Lammermoor* (1819) と *Kenilworth* (1821) であろう。まず *The Bride of Lammermoor* から見ると、それはおおよそ次のような話である。

父の代に Sir William Ashton に父祖の所領をだましとられた Edgar Ravenswood は、彼に恨みと敵意を抱いているが、たまたま彼と彼の娘 Lucy の生命を救うという事件があり、彼女を恋し彼女にも恋される仲になる。ところが、彼女の父と母は彼女を Bucklaw という青年と結婚させようとし、Edgar の留守の間に無理やりに彼女とその青年との結婚式をあげさせる。その席上で彼女は発狂して新夫を刺し、(彼は刺されただけで死ななかったが) 自分も死ぬ。帰った Edgar は彼女の兄との決闘に出かける途中、流砂にまきこまれて命を失う。

このように、この小説は、Edgar が仇敵の家の娘 Lucy と恋仲になり、二人とも悲劇的な死をとげるという点で、死の順序は男女逆だが、*Bomeo and*

Juliet に似ているといえるだろう。ことにこの話を簡略にしてオペラ化した Donizetti の *Lucia di Lammermoor* (1835年初演) では、最後の場面が、Lucia の兄との決闘のため祖先の墓場で待っていた Edgardo が彼女の葬列を見て自殺するというように変わり、やはり男女の死の順序は逆であるが、*Romeo and Juliet* の最後の場面にいっそう近くなる。E. M. Forster が *Where Angels Fear to Tread* (1905) で、イギリスからイタリアへ旅行した Philip が Verona で Juliet の墓を見たのち、Monteriano (San Gimignano) でこのオペラを見て感激するというふうな、この劇とオペラの相関性を暗示するくだりが想起される。

しかし、この小説は1669年にスコットランドの南東部の Lammermoor で Janet Dalrymple という女性が新婚の床で夫を刺殺したという実話を題材にしたもので、オペラの劇への意図的な近づけの試みはともかくとして、本来大まかなストーリーにおいて劇と偶然一致したというにすぎない。細部においては小説と劇はまったく異なるのである。この小説が僅かではあるが細部において Shakespeare と共通点を見いださうるのは、むしろ *The Tempest* との間においてであろう。

The Tempest は魔術を主題とする劇であるが、ここには二種類の魔術がある。一つは Prospero の代表する白魔術である。これは人びとを和解させ人びとに利益を与えるよい種類の魔術である。これに対して、もう一つは Sycorax の代表する黒魔術である。これは人びとを墮落させ人びとに危害を与える悪い種類の魔術である。*The Bride of Lammermoor* の老婆 Ailsie Gourlay は後者の魔術者であるが、彼女には一部分前者の魔術者的なところも加味されている。

ところで、この小説の女主人公 Lucy のイメージは *The Tempest* の女主人公 Miranda のイメージと重なる。

She (Lucy) was identifying herself with the simple, yet noble-minded Miranda, in the isle of wonder and enchantment. (Everyman's Lib., 40)

そしてこの Lucy ——しかし両親に Edgar との結婚を反対され、Bucklaw と

の結婚を無理強いされて絶望のあまり神経症にかかった Lucy であるが——を保護するのに雇われるのが、この Gourlay なのである。

Miranda を保護して孤島に漂着し、彼女にやさしく昔の話をして聞かせる Prospero よろしく、最初は Lucy を親切に扱い伝説の話をして聞かせる Gourlay は、話をしているうちに次第に Sycorax の本性を表わすのである。

her attentive services and real skill gained her the ear, if not the confidence, of her patient; and under pretence of diverting the solitude of a sick room, she soon led her attention captive by the legends in which she was well skilled, and to which Lucy's habits of reading and reflection induced her to "lend an attentive ear." Dame Gourlay's tales were at first of a mild and interesting character....

Gradually, however, they assumed a darker and more mysterious character, and became such as, told by the midnight lamp, and enforced by the tremulous tone, the quivering and livid lip, the uplifted skinny fore-finger, and the shaking head of the blue-eyed hag, might have appalled a less credulous imagination, in an age more hard of belief. The old Sycorax saw her advantage, and gradually narrowed her magic circle around the devoted victim on whose spirit she practised. (299)

このように、*The Bride of Lammermoor* には、明らかに *The Tempest* の Miranda や Sycorax のイメージが出ている。しかし、これらのイメージが出るのは、ほんの細部としてにすぎない。これに対して、Shakespeare とほぼ同じ時代を扱った *Kenilworth* では、全篇を通じてもっと大々的に *The Tempest* のイメージとともに *A Midsummer Night's Dream* のイメージが見いだされるのである。

2

全41章から成る Scott の小説 *Kenilworth* は、各章の冒頭に Shakespeare などから引かれた motto をもつのみならず、章中には直接 Shakespeare からの引用をもっている。それらは、第13章の *The Tempest* からの引用、第17章の

A Midsummer Night's Dream からのもの、それに第20章の *The Winter's Tale* からのもの、の三つである。しかし、ここでは Shakespeare の影響と直接結びつく例として、前二者をあげよう。

まず *A Midsummer Night's Dream* (II, i, 155—64) である。Elizabeth 女王がある行幸のとき船の上で臣下たちに「最近 Shakespeare という男が面白い劇を上演するので人びとが伝統的な熊いじめを見にゆかなくなったというが、皆のものはこれについてどう考えるか」とのご下問があった。皆の者がそれは残念なことだと答えるが、*A Midsummer Night's Dream* のことが話題になって、その美しい一節の朗誦者として Walter Raleigh が名指しされる。

At the command of the Queen, that Cavalier repeated, with accent
and manner which even added to their exquisite delicacy of tact and
beauty of description, the celebrated vision of Oberon:

“That very time I saw, (but thou couldst not,)
Flying between the cold moon and the earth,
Cupid, all arm'd: a certain aim he took
At a fair vestal, throned by the west;
And loos'd his love-shaft smartly from his bow,
As it should pierce a hundred thousand hearts:
But I might see young Cupid's fiery shaft
Quench'd in the chaste beams of the watery moon;
And the imperial vot'ress passed on,
In maiden meditation, fancy free.”

(Kenkyusha, 1, 275)

女王はご自分のことにふれているこの詩行をすでにご存知で、それがお気に入りの Walter Raleigh によってすばらしく朗誦されるのをお聞きになると、ご自分も表情と指先で拍子を取りながら大変ご満悦であった。彼が朗誦をやめると、ご自分で最後の行（‘In maiden meditation, fancy free’）を口ずさまれ、あの熊いじめか Shakespeare かという議論にきっぱりと決着をつけられたのであった。

この挿話はいちじるしいアナクロニズムである。この小説は1575年の出来事

を扱ったものであり、*A Midsummer Night's Dream* はそれから20年も後（1595—6）に書かれたものだからである。しかし、Scott が承知の上でこのような時代錯誤を犯しながらもこの Shakespeare の詩句を長々と引用したのは、これがこの小説のテーマの下敷になるものであることを彼が知っていたからであろう。すなわち、Scott は、後世の諸学者が指摘するように、この行の ‘the cold moon’ と ‘the earth’ がそれぞれ Elizabeth と（Amy の死後 Leicester 伯がひそかに結婚した）Lady Sheffield をさすということまでは知らなかったとしても、‘a fair vestal’, ‘imperial vot’ress’ が Elizabeth をさすことばかりでなく、Cupid と Cupid の放つ矢がそれぞれこの小説のテーマである Leicester と彼の Elizabeth への求婚をさすことは知っていたであろう。

つぎは *The Tempest* からの引用（II, ii, 188—9）である。Wayland は穴のなかにかくれて魔術や錬金術の研究をしていたが、変装して Amy の許婚者 Tressilian の従者として彼についてゆくことになる。

When challenged by Tressilian, who desired to know the cause of a metamorphosis so singular and so absolute, Wayland only answered by singing a stave from a comedy, which was then new, and was supposed, among the more favourable judges, to augur some genius on the part of the author. We are happy to preserve the couplet, which ran exactly thus, —

“Ban, ban, ca Caliban —

Get a new master — Be a new man.” (195)

小説の扱っている年代の1575年より35, 6年も後に書かれた Shakespeare の最晩年の作品 *The Tempest* (1611—2) を、この時代にやっとその才能が語られ始めた詩人の作品とするのは、何というところか時代錯誤であろう。しかし、これもやはり、この引用句のあたりのところがこの小説の主要なテーマである宮廷の陰謀を示唆するからであろう。

The Tempest で Prospero の奴隷の怪物 Caliban は、Stephano をそそのかして彼に Prospero を殺させ彼を王にしようという陰謀を企てる。そのとき彼の言う言葉が

'Ban, 'Ban, Cacaliban

Has a new master: get a new man.

で、彼はここで自分は Stephano を新しい主人としてもつといい、Prospero にむかって新しい従者を得なさいといっているのである。引用句はこれを少し変えたもので、この場合は Wayland がどちらも自分にむかって、自分も魔術の先生を持っていたが、それに代わって Tressilian という新しい主人を持てといい、変装して新しい人間になれというのである。ともあれ、*The Tempest* のこのあたりのところは、小説の悪党 Varney が主君 Leicester 伯をそそのかして彼を王にしようとする陰謀と結びつくのである。

こうして、われわれの問題は、Leicester 伯が Elizabeth 女王の手を求めて Kenilworth 城で彼女を歓待した出来事と *A Midsummer Night's Dream* との関係、および Varney が伯を女王と結婚させ彼をイギリス王にしようとした陰謀と *The Tempest* との関係を、もっと詳細に考察することにある。しかし、この二つの問題にはいるに先立って、まず、この小説のストーリーの枠組において Shakespeare のどの劇から影響をうけたかという問題から考察をはじめよう。

3

Scott は最初この小説を Cumnor Hall という題で書こうと思った。しかし出版業者の Constable が Kenilworth の題を主張したので、結局出版社の希望通りに現在の題名になったという。この二つの題名が示すように、この小説は、Leicester 伯の妻 Amy Robsart が囲われている Cumnor Place と Leicester 伯が Elizabeth 女王を歓待した Kenilworth 城を主要舞台とする。そして舞台は Cumnor Place から Kenilworth へ、そして Kenilworth からまた Cumnor Place へと移って、小説は終るのである。この二つの舞台を往来するストーリーの組立は、*The Tempest* のそれを想起させる。*The Tempest* もまたイタリア（ミラノ、ナポリ）から孤島へおもむきそして孤島からイタリアへ帰る

話だからである。ただこの劇では、孤島が唯一の舞台で、そこから来、そこへ帰るイタリアは、Prospero の口によって語られるだけだという違いがあるが。

まず Cumnor Place から Kenilworth への舞台の移動について見よう。Amy は侍女の Janet の取り計らいによって、Varney に虐待されている Cumnor Place から脱出する。Janet は Amy にまさかのときのための宝石箱をもたせて出発させる。Amy は待ちうけていた Wayland が外とうをしいてのり心地のよいくらをつくらせてくれた小馬にのって、彼といっしょに出かける。道中、少年がのってきた小馬にのりかえると、「それはわしの馬だ」といって反物商が追いかけてくる。が、やっと話がついてまた出かける。途中でちゃんとした馬にのりかえ、彼は Amy を自分の妹だと偽ってゆく。そこへ馬にのった Varney と Lambourne が追いかけてくる。Wayland と Amy はちょうど前方に Kenilworth の女王の行幸の余興をするためにゆく仮装した酔った芸人たちを見かけ、そこへ逃げ込み、「ずっとそのグループの一員であったかのようにそこにまぎれこんだ。」一行は「仮装を守るために上に固苦しい服」をつけている。なかでも一人の少年はこんな奇抜な格好をしたいたずら小僧である。

a little diminutive urchin, wearing a vizard with a couple of spouting horns of an elegant scarlet hue, having moreover a black serge jerkin drawn close to his body by lacing, garnished with red stockings, and shoes so shaped as to resemble cloven feet, — (381)

このいたずら小僧は Wayland の弟子で、彼が Flibbertigibbet と呼ぶ少年である。そこへ Varney と Lambourne があわただしくやってくるが、このいたずら小僧のとりなしで、Amy を見つけることができず、Kenilworth にむかっていってしまう。こうしてあやうく難をのがれた二人は、彼らのあとから Kenilworth に到着する。

この Wayland が Amy をかばいながら Cumnor Place から Kenilworth へつれてゆくところは、*The Tempest* の Prospero が Miranda に話す、二人がイタリア(ミラノ)から追われ破れ舟で難儀しながら孤島に漂い着く話と、

のちに Alonso や Antonio がイタリア（ナポリ，ミラノ）から同じ孤島に漂着し Prospero の魔術に翻弄される話に近いだろう。そして Amy の脱出を助け彼女に宝石箱をもたせる Janet は、*The Tempest* の、生活必需品、本までもたせて二人を舟出させた Gonzalo にあたる。また Flibbertigibbet は、穴に住んで魔術や錬金術を研究していた Wayland の手先をつとめていた人で、小さくで「風の早さ」をもつという点で、やはり岩屋で魔術を研究していた Prospero の手先でやはり風のように早い妖精 Ariel にあたるだろう。しかし彼が小説の最後のところで Leicester と Tressilian の決闘に分けて入るところは、*A Midsummer Night's Dream* の Puck が Lysander と Demetrius の決闘を許さないところを思わせる。また Wayland が Leicester に仕えるもう一人の魔術者 Alasco の Amy に与えた毒を解毒剤によって消し彼女の命を救うのは、Prospero が Miranda が Caliban に犯されようとしたところを救うのに似ている。Wayland が Prospero とともに白魔術者であるのに対して、Alasco は Sycorax の息子 Caliban とともに黒魔術者なのである。なお、Amy と Wayland が仮装した人びとのなかに入って追跡者から難をのがれるのは、*The Merchant of Venice* の Jessica と Lorenzo が Jessica の「宝石と金貨の箱」をもって仮装してカーニヴァルの仮装者のなかで消え Shylock の怒りとユダヤ人 Tubal の探索からのがれる話と何となく似ているようである。

つぎは Kenilworth 城での出来事である。ここは Leicester 伯が Elizabeth 女王を迎えて歓待するページェントの場である。初日の Hercules ような門番、湖上の麗人、イルカにまたがった Arion の三つの見世物につづいて、翌日のイギリスを征服した諸民族の争いを表わす仮面劇が行われる、この小説のクライマックスの場面である。この場面は *The Tempest* でみると、やはりこの劇の一つのピークと考えられる、Prospero が Ferdinand と Miranda の結婚を祝うために魔術で呼び出す Iris + Ceres vs Iris + Juno vs Ceres のやはり三部のページェントとそれにつづくニンフたちと刈り手たちの見せる優美なダンスがこれにあたるだろう。

最後は Kenilworth 城から Cumnor Place への舞台の移動である。Kenilworth 城で女王の前に引き出され女王の質問にしどろもどろの答えしかできず

精神異常者と認められた Amy は、Tressilian との仲を疑わせる Varney の虚言により、Leicester 伯の指示で Cumnor Place へつれ帰され殺害されることになる。ところで、Varney と Cumnor Place の主 Foster が彼女をつれて発ったあと、Leicester は思い直して Lambourne を使者として送るが、Varney は彼を撃ち、Foster とはかつて彼女を死に至らせる。そして結局二人も自分の命を断つのである。

この部分も、*The Tempest* では Prospero の言葉によって表わされるが、彼が最後に一同を自分の岩屋に招いて、島に着いて以来の話をしたのち、

... in the morn

I'll bring you to your ship and so to Naples,
Where I have hope to see the nuptial
Of these our dear-beloved solemnized;
And thence retire me to my Milan, where
Every third thought shall be my grave. (V, i, 306—311)

というところに半ばながら該当するだろう。

以上見てきた *Kenilworth* と *The Tempest* (*A Midsummer Night's Dream* や *The Merchant of Venice* はしばらくおくとして) の類似は、前者が詳細な外面的描写であるのに対して、後者は主人公 Prospero の言うセリフか彼が見せるヴィジョンによって比較的簡潔にのべられるものであるという違いをもつばかりでなく、人物関係やストーリーの関係をまったく異にする、いわばただ骨格だけで肉付きを異にする類似にすぎない。以下において、もっと話の内容とテーマに密着した類似の例として、上述の *Kenilworth* 城における Leicester 伯の Elizabeth 女王歓待のページェントと *A Midsummer Night's Dream* の Oberon のヴィジョンとの類似および Elizabeth 女王に対する Varney などの陰謀と *The Tempest* の Prospero に対する Caliban などの陰謀との類似について考察してみよう。

まず Kenilworth 城のページェントの話からみると、この話は、Scott がこの小説で引用している *A Midsummer Night's Dream* の Oberon のヴィジョンに先立つ、もう一つの彼のヴィジョンに出てくるもので、彼が Puck に言う次の言葉である。

... Thou remenberest

Since once I sat upon a promontory,
And heard a mermaid on a dolphin's back
Uttering such dulcet and harmonious breath
That the rude sea grew civil at her song
And certain stars shot madly from their spheres,
To hear the sea-maid's music. (II, i, 148—54)

これは Kenilworth 城のページェントのとき、人びとがみさきの上に坐ってそれを見物したことを述べたもので、そのページェントに人魚（これは Arion を変えたもの）がイルカの背にまたがる演技をしたことや、それにつづいた、星が天から降ってきたかと思われるようなすごい花火があったことをのべたものである。ところで、このページェントのとき Arion を演じた男は声がしゃがれてうまくセリフが言えなかったので、仮装をぬいで、「自分は Arion ではなく、正直者の Harry Goldingham だ」と言ったが、これが、彼がまともにセリフを言ったより Elizabeth 女王を喜ばせたという話が伝えられている。この劇には、この話を暗示する言葉も見られるのである。

Bottom が Pyramus を演じるとき、自分が自殺する場面を観客の夫人たちがこわがるといけないから

... tell them that I

Pyramus am not Pyramus, but Bottom the
weaver: this will put them out of fear. (III, i, 21—3)

という。また Bottom はライオンを演じる人を夫人たちがこわがるといけないから、こう言えと教えてやる。

‘... If you think I
come hither as a lion, it were pity of my life: no,
I am no such thing; I am a man as other men are;’
and there indeed let him name his name,
and tell them plainly he is Snug the joiner. (III, i, 43—7)

Scott の小説 *Kenilworth* 第三十章の Elizabeth 女王を迎えるページェントの最後を飾るのが、この Arion と花火の見世物なのである。

それは1575年7月9日のたそがれ時である。行列は Chase を通過し Gallery-tower に近づく。沿道の人びとの歓声は祝祭音楽や祝砲を圧するほどのにぎやかさだ。宮廷の貴夫人たちを従えた「百王の娘」である女王を先頭に、「黄金の像」のように輝く伯がその右側によりそう。行列が Gallery-tower につくと、いよいよページェントの始まりである。

まず第一は巨漢の門番の出番だ。彼は酒を飲みすぎてセリフが口から出てこない。プロンプターの Flibbertigibbet にピンできざされて突然雄弁に語り出す。

“... what vision have we here?
What dainty darling’s this — what peerless peer?
What loveliest face, that loving ranks enfold,
Like brightest diamond chased in purest gold? (448)

と彼が口を極めて女王を賛美する言葉を彼女はこの上なく優雅に受けとり、一礼して塔を通りぬける。そこから Mortimer’s Tower までの間に長い橋がある。轟々たる音楽もようやく静まるころ、女王が昼のように明るい橋の上に歩を運ぶや、新しいスペクタクルが始まる。

湖の上に多種多様なたいまつに照らされた、漂う島を表わす筏が浮かび、そのまわりを、Tritons, Nereids などがのる、海馬を表わす漂うページェントがとりまく。島の上には二人のニンフにともなわれて一人の奇装をこらした美女がのっている。この美女が絵画的効果をもって航海を終え、Mortimer’s Tow-

er へ上陸したとき、ちょうど女王はその塔の前に姿を現わす。その見知らぬ女は自分がかの有名な湖上の麗人であると名乗る。彼女は昔からこの湖を支配していたが自分の水晶宮から水上に顔を出すのはこれが始めてで、‘peerless Elizabeth’ を歓迎するために来たのだと言う。女王はこの挨拶をていねいにうけとり、冗談めかして答える。

“We thought this lake had belonged to our own dominions, fair dame; but since so famed a lady claims it for hers, we will be glad at some other time to have further communing with you touching our joint interests.” (451)

さて、この湖上の麗人のページェントが終わると、最後はいよいよこのページェントの真打ともいふべき本題の Arion と花火のページェントである。この女王の答えを聞いて湖上の麗人は姿を消す。と、

Arion, who was amongst the maritime deities, appeared upon his dolphin. But Lambourne, who had taken upon him the part in the absence of Wayland, being chilled with remaining immersed in an element to which he was not friendly, having never got his speech by heart, and not having, like the porter, the advantage of a prompter, paid it off with impudence, tearing off his vizard, and swearing, “Cogs bones! he was none of Arion or Orion either, but honest Mike Lambourne, that had been drinking her Majesty’s health from morning till midnight, and was come to bid her heartily welcome to Kenilworth Castle.”

This unpremeditated buffoonery answered the purpose probably better than the set speech would have done. The Queen laughed heartily, and swore (in her turn) that he had made the best speech she had heard that day. Lambourne, who instantly saw his jest had saved his bones, jumped on shore, gave his dolphin a kick, and declared he would never meddle with fish again, except at dinner. (451)

セリフが言えなかったのは Harry Goldingham がしゃがれ声だったからであつたのを、飲み助の Lambourne が一日中飲んでいたのでした。たり、ギリ

シアの詩人、音楽家で、海中にほうりこまれたとき、彼の音楽を聞きに集っていたイルカに救われ、陸に帰ったという Arion を、やはりギリシアの猟師で Pleiades を追って Artemis に殺されたという Orion と混同し、Arion だったか Orion だったかと Lambourne にとぼけさせたり、また彼に食膳で以外は魚に手を出さないなどと巧妙なシャレを言わせたり、史実を変え史実でないことを加えながら、Scott はこのページントを見世物風にユーモアたっぷりに描いているのである。

しかし、このように三つのページントを彼の筆力のかぎりをつくして描いてきた Scott は、最後にきてどうやら息切れでもしたかのように、自分の筆をすてて他の人 Laneham の記述を借りて述べるのである。女王が城内に入ろうとするやいなや、あの記憶すべき花火が水上と地上で行なわれる。

“Such” says the clerk of the Council-chamber door, “was the blaze of burning darts, the gleams of stars coruscant, the streams and hail of fiery sparks, lightnings of wildfire, and flight-shot of thunderbolts, with continuance, terror, and vehemency, that the heavens thundered, the waters surged, and the earth shook; and for my part, hardy as I am, it made me very vengeably afraid.” (451—2)

上に一部引用した門番の言葉がイミテーションとして引かれた Gascoigne の *The Princely Pleasures at the Courte at Kenilworth* (1576) とともに、上述のページントのソースとなった Laneham の *A Letter* から、この一文は引かれている。しかし、他の本から引いたにせよ、自分の文章で書いたにせよ、Scott はこういうスペクタクルの描写に力を注いでいることが分かる。Shakespeare が単に Oberon のヴィジョンとしてあるいは Bottom が上演の指示として述べているにすぎないものを、Scott は読者の目の前に実際のスペクタクルとしてなんと鮮やかに描いていることだろう。

5

Carlyle は、Scott を Shakespeare と比較して、Shakesmeare が人物を内か

ら描くのに対して、Scott はそれを外から描くという。なるほど、いま見たように、Scott はスペクタクルのような外面的な美しさを描くことを得意とする。しかし、彼もまたときには内面描写においてもすぐれているのである。そのとき彼が示唆を得るのが、ほかならぬ Shakespeare なのである。そのなよりの例が、これからのべる Elizabeth 女王に対する Varney などの陰謀とそれが発覚したときの女王の心の動揺を描くくんだりである。このくだりを考察するに先立って、まずこれに対応する *The Tempest* のくだりを見よう。

Caliban は Stephano に酒を飲まされると、その霊力に魅せられ、彼を尊敬するようになり、自分の主人 Prospero をすてて Stephano の臣下になることを誓う。前述の “Ban, 'Ban, Cacaliban” に始まる引用は、このときの彼の言葉である。そうこうするうち、彼は、Prospero が午後に昼寝をする習慣があるからそのときに彼を襲えばよいと Stephano に教え、彼に Prospero を殺害して王になる陰謀を吹き込む。これを聞いた Ariel はこれを主人 Prospero に伝える。Prospero が Ferdinand と Miranda との結婚を祝うために見せたヴィジョンが終りに近づいたときのことである。彼は Ariel の知らせを思い出して突然はっとする。

Pros. [Aside] I had forgot that foul conspiracy
Of the beast Caliban and his confederates
Against my life: the minute of their plot
Is almost come. [To the Spirits.] Well done! avoid; no more!

Fer. This is strange: your father's in some passion
That works him strongly.

Mir. Never till this day
Saw I him touch'd with anger so distemper'd. (IV, i, 139—45)

この *The Tempest* のくだりを念頭において、*Kenilworth* の Varney などの Elizabeth に対する陰謀の話に目を向けよう。Leicester 伯の奸臣 Varney は伯のために Amy Robsart を誘惑して伯の秘密の妻として Cumnor Place にかくまっている。と、Amy の許婚者 Tressilian はこれを女王に直訴する。伯と Varney が女王の前に集った席で、女王の詰問に対して返答に窮している

伯を見ると、Varney はすかさず前に出て Amy は自分の妻だといつわりの誓言をする。これは Varney が主君を女王と結婚させイギリス王にさせようとする陰謀——彼自身のちに告白するように、‘the depths and shallows of court intrigue’——だったのである。

Varney は Amy にしばらく自分の妻だということにしておいてほしいと頼むが、Amy は聞かず、上述したようにこっそりと Cumnor Place をぬけ出して Kenilworth 城へ来る。そして女王歓待のページェントが催されている城で女王に見つかり、女王の問いに答えて、自分は Varney の妻ではないと明言し、“The Earl of Leicester knows it all.” と答える。女王は Amy を Leicester の前へ引っぱってゆき、廷臣たちを驚かせるような声で “Stand forth, my Lord of Leicester.” と叫ぶ。

If, in the midst of the most serene day of summer, when all is light and laughing around, a thunderbolt were to fall from the clear blue vault of heaven, and rend the earth at the very feet of some careless traveller, he could not gaze upon the smouldering chasm, which so unexpectedly yawned before him, with half the astonishment and fear which Leicester felt at the sight that so suddenly presented itself.

(500)

廷臣たちには Leicester はやがて自分たちの主君になるだろうと思われていたさなかだった。彼女の怒りは極点に達した。彼女は最後の審判のときの恐ろしいラッパの音のように、“Knowest thou this woman!” と叫んだ。

“Leicester,” said Elizabeth, in a voice which trembled with passion, “could I think thou hast practised on me—on me thy Sovereign—on me thy confiding, thy too partial mistress, the base and ungrateful deception which thy present confusion surmises—by all that is holy, false lord, that head of thine were in... great peril.”

(501)

このように夫が窮地に立たされているのを見ると、Amy は前言をひるがえして彼を弁護する。女王は Amy を狂人だと思うが、Varney も言葉巧みにそれ

に同意するのでその場は一応おさまる。

しかし、Leicester もいつまでも Amy のことをごまかしておくわけにはゆかない。やがて彼は白状することになるのだが、その前の Elizabeth の狂瀾ぶりを見よう。

Elizabeth... was walking to and fro in a violent agitation, which she seemed to scorn to conceal, while two or three of her most sage and confidential counsellors exchanged anxious looks with each other, but delayed speaking till her wrath had abated. (580—1)

それは最長老の廷臣 Burleigh によって “give not way to this wild storm of passion.” “be composed.” となだめられたからであった。

この Varney にそそのかされた Leicester の Elizabeth に対する陰謀——Elizabeth 自身が、Amy との結婚を秘密にして ‘he must presume to think my hand and crown at his disposal.’ と毒づく彼の陰謀——を、Caliban にそそのかされて Stephano が Prospero に取って代わろうとする陰謀と比較すると、ストーリーの細部においては異なるところがあるにせよ、華やかなページェンのただなかで青天の霹靂のように突然怒り狂う点で、Elizabeth と Prospero は酷似するのである。

この内面感情の爆発という心理描写において、*Kenilworth* は明らかに *The Tempest* から影響をうけている。しかし、小説を劇と比較すると、劇では Prospero の怒りは Ferdinand や Miranda の目に写ったものとして間接的に読者に伝えられるのに対して、小説では Elizabeth の怒りは二章にわたって延々と直接読者の目に見えるように彼女のはげしい身振りをも交えて描かれているのである。Shakespeare は人物を内から描くが Scott はそれを外から描くという Carlyle の言葉は、このような心理描写においてもやはりあてはまりそうである。